

---

# エンドレス スト リ 『もし』

利瀬 時夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンドレス ストリ 『もし』

### 【Nコード】

N5032Z

### 【作者名】

利瀬 時夜

### 【あらすじ】

『もし』 主人公になれるのなら、世界を救いたい。

『もし』 主役になれるのなら、君を護りたい。

『もし』 最強ならば、齒向かう全てを壊したい。

あの日を境に、少年の人生は二百七十度急変する事となる。

子供を車から救って他界と言う、珍しく活躍した少年 如月和人は三途の川へ。其処から天国へ、行くはずだったのだが 其処で和人は自称神様と出逢う。この神様との出逢いが、和人の人生を大きく変えたのだった。

「君、主人公になってみないかい？」

その問い。甘美な響き。そして幕開けたのは和人の物語。

異世界？エルディアンテ？に転生召喚された和人を待っていたのは、RPG宜しくの世界所か、最悪な世界。戦争も巻き起これば、奴隷制度何てのも存在する。人種差別がある国もあれば、小さな紛争が巻き起こり続ける国もある。そんな世界の中で、和人は何を見付け、何を掴み、何を得るのか。これは和人による和人らしい和人の物語。異世界トリップ主人公最強系物語此処に開幕、乞うご期待

不定期更新、更新遅延です。R15程度の性描写や残酷な表現が登場します。苦手な方は即座にバックブラウザ。大丈夫な方は右手に珈琲でも持ちながら暇潰しにお読み下さい。それではどうぞ

## 物語主要用語紹介（前書き）

はい、どうも。

何故か此処に出来上がったこの物語。

何と今までにない作品を、ですって。

どうなるんでしょうか？

では、新作をどうぞ

## 物語主要用語紹介

『エルディアンテ』

主人公の召喚された異世界。

合計六大陸に分裂しており、それぞれがそれぞれで役割をこなしている。

? 東方大陸

? 西方大陸

? 北方大陸

? 南方大陸

? 中央大陸

? 浮遊大陸

何処の領域にも納まらないのが浮遊大陸で、周期をかけて世界を巡っているのだと言う。

十年に一度世界に勇者が召喚される事となっており、丁度主人公は十年目で召喚されたのだと言う。主人公は東方大陸に召喚される事となる。

『第六血盟』と呼ばれる大陸を司る頂点達の集まる集会もあり、これに出席するのは皆『司界者<sup>ルシア</sup>』と呼ばれる者達だけである。『司界者』は百年に一度の割合で交代が為され、『司界者』の力は軍神と呼ばれる召喚獣をも一撃で殺す力を持つと言う。

マテリアル・ワールド  
『物質世界』

地球の、それも人間界を指す言葉。

物質や法則で完全支配された世界の事を指す単語。

十年に一度、勇者として召喚する為の媒体でもある。

ルシア・デルエート・アティブネス  
『司界者介入禁止令』

司界者を決して戦争に介入させはならないと言う皆で決定した法

律。

破った者には神の鉄槌と言つ恐ろしき罰が待っていると云う。神の鉄槌は天上の裁きと言つ話もあり、天上の裁きを受けた者は欠片一つも残らず消え去る運命とも言われている。

『魔力』

常人には不可能な手法や結果を実現する力の源。自然界に満ち溢れており、精霊の力とも呼ばれている。

『魔法』

魔力を媒体として発動する超常的克神秘的な力。基本的に黒魔術と白魔術に大分類されるが、この分類は便宜的な物で、実際時魔術や空間魔術等も存在するため数は不明とも言える。

文化文化、居場所居場所で魔術発動条件は違い、それが自然界の精霊に干渉する事で発動する魔術と、自然界に干渉するだけで発動するかの違いや、神への祈りや誓い、生贄により発動する犠牲儀式魔法なども民族間では存在したりもする。一般的に魔法は『マジ』や『マジエスタ』と呼ばれ、魔法相殺、魔法発動無効化装置等が今では存在する。『水晶』<sup>クリスタル</sup>と呼ばれる魔力により生成された魔力の塊を媒体に発動する事も可能。他にも『妙技』や『珍技』、『魔道』や『魔導』とも呼ばれる力でもあるが、それはやはり文化の違いとも言える。

『スベル  
詠唱』

魔法を発動する際に捧げる言の葉。

長ければ長い程、その魔法の級は高く、威力も大きい。

『アートスキル  
技巧能術』

剣術、槍術、弓術、武術、流術を指し、技としてそれを確定する為の能力手段。

魔法を持たない者は、この力を強力化させ、単独でも最前線を戦い抜ける様に日々訓練を怠らないと言う。相当なスキル所持者は最前線でも主力を張れる程。

『王政国家マスケルディア』

通称『王国』。時代の波に飲まれた悲運の国ともされ、伝説にも残る霸王の血統を引く『朱覇』<sup>しゆは</sup>司界者エルシエアⅡロンⅡスザクがマスケルディア家興したのを発祥とする、由緒正しき国家。霸王の遺産『朱覇の指輪』を代々受け継ぐ三国の一つ。同盟国や属国は多く、関係は概ね良好。一部を除く。人口約3000万人を誇る国家で、エドヴィンと呼ばれる一騎当千にも及ぶ朱天騎士を保有する強国でもある。しかし、建国から350年の時、隣国であった『皇帝国家テンペシア』の滅亡により、領地拡大するもその分、王国を滅ぼし、その領地を全て得ようとする国家との戦争により、第一時期のマスケルディアは滅亡。そして新たにマスケルディアとして建国された現在は概ね関係良好、領土もそこそこと言った状態で存在している。

『皇帝国家エスペンティア』

通称『皇国』。一度帝国に滅ぼされたテンペシアの復興後の姿。消失を遂げた国家とも呼ばれており、もう一つの霸王の血統を引く『碧覇』<sup>へきは</sup>司界者ラヴニアⅡアスケルⅡゲンブが存在し、霸王の遺産『碧覇の断片』を保有する国家。同盟国と言うか連合国『連合国アスケメディア』の軍を駐留させようとした親アスケメディア派が武装蜂起。この隙に乗じて『帝政国家アルトレスト』軍が侵攻し、内乱状態にあった皇都エスペアを包囲する。だが、それから数日後、謎の大爆発により当時のテンペシアは滅亡した。エスペンティアはテンペシアの残骸を排除する代わりに戦死した者達や罰初に巻き込まれた民間人を供養する儀を行い、皆を納める教会を造り上げた。ヴァスタと呼ばれる第一王子も程無くして戦死する。そしてテンペシアは完全滅亡したと言う。現在エスペンティアの人口は2500万

人弱を持ち、中にはテンペシアの生き残りも存在するらしいが、見た事はないと言う。

『帝政国家アルトレストタ』

通称『帝国』。全土に覇を唱える最強の軍事国家。最後の霸王の血統を引く『黄覇こっほ』司界者エスケアⅡルアⅡビヤツコが存在し、霸王の遺産『黄覇の契剣』を保有する国家。東方大陸の大半を領有する強国で、元は『エスシア連邦』と呼ばれる『アルトレストタ』、『ヴァイツ』、『コーディアンツ』の三大陸に跨る連邦大陸の都市国家の一つに過ぎなかったが、共和制、帝政と政治形態を変える過程で本格的な軍事国家と化し、今やエルディアンテで、一、二を競う大国となった。建国当初から協議制が根付いているため、国内の法制度は先進的克合理的。階級差別や奴隷制度は存在はする物の、市民の生活水準は極めて高い。実力で上の級に上がる事も許可されている。技術大国として発展した国家は、様々な軍事兵器を所持しており、空中浮遊要塞『要塞艦隊コルモア』や『軽巡艦隊シヴァ』、『殲滅要塞ルンフェル』等といった要塞艦隊が多く空中を浮遊している。人口は4000万人と大陸の中ではダントツでもある。

『神徒国家ヴァルエルータ』

通称『神国』。エルディアンテ全土に伝わる宗教、『サステイヴァ教』の聖地。厳密には国家とは言えないが、一応政治形態や軍事形態が整えられている為、国家として扱われている。あくまでサステイヴァ教修行の地である此処は、政治形態が整っているとは言え、其処まで深くなく、教団支援者や多額の寄付金を難民の救済に務めている、どちらかと言えば非政府的機構国家。また、大僧正がマスケルディアとアルトレストタの王位継承に関わる立場に居る事から、ヴァルエルータは国際情勢に対して一定の影響力を持つ。

『学術国家エルグラス』



通称『術国』。覇権を狙う魔法に置いては相当の実力と実戦経験を持つ国家。霸王の血統を引く『蒼覇』司界者スサナⅡエルⅡソウリユウが存在し、霸王の遺産『蒼覇の盟壁』を保有する国家。エルデアンテ大陸のアハト大砂海を越えた先にある西を納める大国。大陸中央に広がる平野部を領土とし、諸氏族の連合体として誕生した国家。国の殆どが魔法を扱える人種で、魔法を所持し、騎士にも立ち向かい、歯向かう、戦える部隊を『蒼空魔団』を保有する珍しい国家でもある。覇権を狙う国であるが、アルトレストア帝国との戦争で大敗。現在は劣勢に立たされている。軍国化制度の軍事組織を基本とした国家で、帝政政治形態を持つ。人口は1500万人と少なく、その約過半数が魔法使いである。

#### 『連合国家アスケメディア』

通称『連国』。様々な諸国家群と、諸氏族の連合体として誕生しか国家。霸王の血統を引く『紫覇』司界者マテラⅡリアⅡイズナが存在する、いや、と言うより、存在してくれた珍しい国家。故にこの国家はマテラにより建国された国家とも言え、マテラの『国家を纏める国家』の案から生まれたともされる。解放軍と呼ばれる軍事組織を持ち、人口はおよそ1000万人。その内の三割は解放軍として最前線に立ち続けている。解放軍とは奴隷として扱われる民族人種、国家の解放を狙った外交圧力組織。エルデアンテ全土に解放軍は地下組織として存在するも、アスケメディア程の実力者の集う解放軍は中々存在しない。

#### 『浮遊国家イエシニクリ』

通称『浮国』。危うい自由と解放に浮かぶ中立国家。霸王の血統を引く最後の者『黒覇』司界者マサムネⅡデⅡミハトⅡハバキと呼ばれる最後の血統者を存在させる、霸王の遺産『黒覇の魔晶』を保有する浮遊国家。連邦時代から続く自治的国家で、サスヴァーン侯の手腕に自治問題が掛かっている。現在の元首はレルヤⅡハルⅡサスヴ

アーン七世。魔法の蓄積された水晶の源でもある『魔晶』の産出する唯一の魔晶鉱を保有する。この魔晶鉱も管轄の内であり、無許可の密猟は禁止され、した者には罰が与えられると言う。近代の政治形態は帝国よりで、だが、帝国から人々を解放しようと言う意識は変わらず、解放軍の組織と連絡を密通している。中立の立場から人口800万人での停戦調停と称しつつ、己が国に有利な情報を発表した。その為、現在は中立国家と言うより、王国に良好な関係を築く国家とも言える。

## 主要登場人物紹介

『登場人物紹介』

名前：如月和人 | Kazuhito Kisaragi |

年齢：18歳

職業：高校生

身長：178?

髪色：黒髪ストレート

瞳色：藍色

種族：『人間』  
ヒューマン

台詞：『悪いね、これが俺だよ』

能力

ファンタジネット・クリエイター

『空想具現者』

インフォルテリオ・サーバー

『情報会得者』

付属

ロンド・ザ・フィクション

『霧消輪廻』

性格

一般高校に通っていた普通で健全な男子高校生。

無論、無能力者の魔法使用不可能の人間。

しかし、交通事故に巻き込まれ他界。天国に行く前の三途の川で神様と出会い『輪廻召喚』ロンド・ザ・サモンにより異世界に『勇者』エルディアンテとして召喚される事となる。

頭脳も運動神経も普通だが、その手先の器用さと、発明力、行動力、反応速度は一級品らしい。

何度もバスケ部や剣道部にスカウトされたが、断って来たらしい。余り怒らない性格だが、コンプレックスである『女顔』と『木偶の坊』を言われるとキレる。怒らせてはならない伽羅で、極度のサデイスト鬼畜悪魔化する恐れがある。通常時は優しく、温厚で、人当たりの良い人物のだが、豹変するとはこの事である。剣術に心得

があり、流れるような舞う様な戦闘をこなす事も出来る人物で、時折相手を煽る様な、それでいて馬鹿にする様な口調を見せるときもある。政治経済倫理系統に強い為、世界では飲み込みが早い。己より幼い子に好まれる為、神様に『ロリコンヤロウ幼女趣味』と言われる事が多々あり。

名前：無し

年齢：不詳

職業：第零番創造神

身長：不詳

髪色：金色ロングストレート

瞳色：碧眼

種族：『人間』

台詞：『脇役じゃないよ、主役になるんだよ。君は』

能力

キブ・ユー・ギブ・ミー

『受渡受取』

アルミア・スキリオ・アビリティアーズ

『億万長者』

性格

言っては悪いかもれないが、ぶっ飛んだ発言もしつつ、真面目な馬鹿。

和人を異世界に転生召喚した張本人で、和人に能力を与えた者。彼に情報を渡しつつ、彼の援助支援をする者。本人曰く和人は『勇者』ではなく『主人公』らしい。

優しく、母親の様な存在でもありながら、子供の様な性格の持ち主。神出鬼没に現れては、消えて行く存在で、必ず彼にアドヴァイスする為に異世界に舞い降りる。携帯電話を異世界でも神様とだけ通じる様にした者でもある。

名前：カルラールグースウエーツアルト

年齢：23歳

職業：マスケルディア騎士団第一騎士隊長

身長：182？

髪色：白銀セミロング

瞳色：真紅

デイヴァンピア

種族：『吸血鬼』

台詞：『私が此処に居る限り、此処は通さない』

魔法

メステイ・エルファイアート

『紅蓮業火』

ビルディアクト・マジエスタ

『肉体強化』

性格

騎士団の第一番部隊長を務める『スウェーツアルト侯爵家』の坊ちやん。

腕前も魔法の威力も相当な物で、流石第一番の隊長を務めるだけの事はあると言いたいのだが、実戦経験は少なく、命令口調とその高貴さ、そして家柄の違いと言う事で周囲の皆は中々彼に近付こうとはしないでいる。熱心な勉強心を持つ姫様一筋の一途な青年でもある。

酒を飲むと泣き上戸になる面倒な性格の持ち主だが、実際優しく、その優しさは中々外に出せないだけであるのかもしれない。主人公とは最初の頃は好敵手関係だったが、仲良くなり、後に好敵手になる事となる。

名前：アルテミシア<sup>II</sup>デ・マスケルディア

年齢：15歳

職業：王政国家マスケルディアの姫君

髪色：金色のロングで、ふわっふわとしたツインテールの髪をしている

瞳色：真紅

エリアス

種族：『靈瑛』

台詞：『ふ、ふふふ、これじゃ！！これを待っておったのじゃ！

！』

## 魔法

ハイフェショナル・ブリジエスタ

『絶対零度』

ネスタ・ア・ネスト・ダークネス

『深淵闇墓』

## 性格

孔明快活で運動神経抜群克頭も良いのだが、能天気のマイペース姫様。

主人公を慕い、勉強を嫌う性格。将来有望と言われているが、どうなのかは不明。

楽しい事、楽しい物、面白い事、面白い物を好み、自分を『井の中の蛙』の御姫様や『何も知らない』御姫様と見られる事を一番嫌う。撫でられる事を好み、いつでもその笑みを浮かべている。唯一の主人公の理解者でもあり、孔明の畏とやりに引つ掛かってみたいと言っていた御姫様でもある。楽しい物を見ると目が絢爛に輝く。

名前：シエナールデルシルシファーレ

年齢：17歳

職業：王政国家マスケルディア騎士団第一騎士副団長

髪色：淡い桃色混じりのセミロングの銀髪

瞳色：淡い桃色

種族：『獣人』  
アニマルテイ

台詞：『私の戦いだ、手出しは無用』

魔法：無し

技巧能術

『騎士剣術』

『流式剣術』

## 性格

気高い女性の騎士で、副団長を務める猫耳と猫の尻尾を持つ。

孤高の騎士で、優しいが、戦闘になると、模擬戦でも相手を殺しに掛かる程。弱みを握られると弱い性格で、実は若干マゾ体質持ち。

運動神経は良いのだが、運動神経だけで、頭は馬鹿。  
脳筋と言つべきだろうか、此処まで来るとそれ以外浮かばない。幼  
き頃に両親を殺しており、年上の男性に

第零話 If (前書き)

さてさて、序曲。

どうなるのでしょうか？

『もし』 読者様なら何を思いますか？  
それではまずは三人称でどうぞ



## 第零話 If

『もし』 主人公になれるのなら、攫さらわれた御姫様を助け出してみたい。

『もし』 主役を張れるのなら、『君』と言う存在への想いを貫き、護り抜いて見たい。

『もし』 最強の力を得られるのなら どうするのだろうか？  
敵と言う敵を薙ぎ倒し、屈服させると言うのも悪くはない。

だけど、最強である事を嘆きながら、悲哀の中で人々から救世の英雄と讃えられるのも悪くない。

勿論、当時の彼に最強の力も、主人公になれるハズの度量も、主役を張れるハズの体質、スター性もなかったし、歳相応の彼の世界は狭かった。だからこそ、この『もし』を気楽に思えたのかもしれない。

崩壊と再生の戯曲ドラマを、唯の二次創作フィクションとして捉えられていたのかも  
しれない。

嗚呼、あの頃の自分を殴ってやりたい。

『主人公』 『主役』 『最強』。

神様は本当に舞台が好きらしい。少年心をくすぐる甘美な響きでもあるのだが、この三単語は確実に『舞台ゲーム』を成立させる為の単語でもある。

最強の魔王を倒す主人公。

主人公を待ち構える魔王。

そして唯、流浪に流離さまよい、世界を孤高の精神で旅しながら主人公に助言や手助けをする主役。

彼がまだ中学生の頃、王道にも王道な『勇者が魔王』を倒す、と言うゲームが流行っていた。

まあどのゲームもそうなのかもしれないが、その魔王の性能が鬼畜故、クリア出来た者は一握り程度しか現れなかったと言う一種の伝説のゲームだ。彼は無論、クリアしたのだが、クリアするまで約6カ月も掛かってしまったのが誤算だ。こんなに掛かるとは思っていなかった。

だが、クリアした時の爽快感と達成感は半端ではなく、ついつい部屋の中で歓喜の声を上げてしまう程。

それこそ勇者のレベルを最高値まで上げて挑んだ。その時の勇者こそ『最強』だったであろう。最強の魔王と最強の勇者。雌雄は中々決さず、結局勇者の粘り勝ちだったのが鮮明に記憶に残っている。そう考えてみると『最強』も実は弱く、脆弱なのではないかと思ってしまう。雑魚相手なら文句を言わせない力を持つが、同じくらしい力を持つ相手が相手すると対等。下手をすれば負けてしまうかもしれない『最強』。それはもう『最強』ではなかるうか？しかし違っていた。

彼は唯、知らなかったただだったのだ。

『最強』の力を得た、『最強』の者達の想いを。

そして彼は告げられる。

色取り取りの花々が彩る大地で、

その凜とした声で、

鐘が鳴り響く中、告げられる。

「君、主人公（主人公）になつてみないかい？」

その日、彼の日常は完全に崩れ去った。

これは約、彼が終わってから2時間後の物語である。

## 第一話 Loss of life

そもそも始まりは、彼女との出逢いまで遡る。さかのぼ

「あゝ、寒い……っ」

新入生の最後の高校説明会準備終了後、彼、如月和人はマフラーで顔の下半分を覆い、凍て付く様な寒さに耐えながら帰路に着いていた。

考えて見れば、来年には高校三年生。大学受験にも将来にも現実味が増す。いや、今のこの時点で大学受験については現実味を帯びていても可笑しくはないのだが、彼の場合、校長推薦を得られるが故に、特に深くまでは考えていなかった。

鞆の中には筆箱と推薦入学についての書類、それと就職案内の書類が入っている。

「俺は高卒就職何て危険極まりない真似はしませんよってな……」  
「やれやれ、と受け取った就職案内の書類の入った鞆に目をやってから肩を竦める。」

「……」

子供が、少女が遊んでいた。

勿論、この季節なのに外で遊ぶ事は良い事だと思うし、元気なのは健康な証拠なのでとても良い事だとも思う。

思うのだが、

「こんな所で遊んでると危ないよ？」

流石に車通りの多い中央道の歩道でボールを蹴っているのは危険極まりない思う。

「？」

「ほらほら、せめて公園とかでやりなさい、ね？」

我ながら母親染みた台詞だなあ、と思いつつ、和人は少女に目線の高さまで腰を落とし、首を小さく傾げて見せた。

「はい」

「ん、良い子だ。きつと親御さんも良い親なんだろうな」  
腰を上げ、和人は着込んでいるモッズコートのポケットに手を突  
っ込んだ。

「あ、……………」

「え？」

背後で何かを見付けた様な声が耳に届く。

気付けば、少女が飛んで行ったゴムボールを追い車道に　。

オオオオオ、と言うマフラーを抜ける改造した車独特の甲高いエ  
キゾーストノートと共に、高速でもないが相当な速度で車道を平然  
と駆け抜け、少女に迫る車　。

「あ、んの、馬鹿……………　ッ!！」

気付けば体は動いていた。

地を蹴り、沸き上がる悲鳴と、急ブレーキを掛けるも止まらずゴ  
ムの焼ける臭いと音が響くそんな空間の中を駆け抜けて　。

少年の意識は彼岸に飛んだ。

「……………あれ？」

何故か己の体が目の前にある。

「……………あるえ？」

何故か己の顔が目の前にある。

何故か己の肉体から切り離されている。

「……………所謂幽体離脱<sup>いわゆる</sup>って奴か、これ……………？」

いや、違つと脳内が否定する。

「じゃあ……、俺、死んだ、のか……？」  
そつだ、と脳内が肯定した。

「……まだ18歳だつたのになぁ」

漸く、<sup>よつや</sup>大学進学も将来も現実味を増して、未来のヴィジョンが見得て来たと言つのに、此処で終わった。

「はぁ……、つて、うおつ、か、体が、浮いた……、ぞ……？」

徐々にこの仮初めの肉体が、己の倒れ臥せている血塗れの肉体から離れて行く。それどころか地面からも離れて行く。

「……時間、つてか……、成程ね……」

何故か冷静で居られる。己の体に時間がないのが手に取る様に分かつた。

街は次第に小さくなって行き、

見得なくなつた。

## 第二話 舞台上で舞い踊るのは……

利根川だった。

「……いや、違つだろ、利根川、じゃあ、ないよな……、此処」

轆<sup>ひ</sup>き殺された和人は、何故か分からないが巨大な川の前に居た。

それこそ利根川級に川幅も大きく、長そうな川。

「……夢、じゃあなんだよな……」

試しに頬を抓つて見る。

「ひゅめひゃない、な……」

翻訳すれば『夢じゃない、な』なのだが、それはどうでも良い。

唯、分かつた事は夢ではないと言う事だ。

「じゃあ此処、何処だよ……」

川を見詰めながら溜め息を吐く。

「此処は三途の川だよ」

凜とした声だった。

「え……、つて、アンタ、誰……?」

見知らぬ相手にアンタ、と言うのは失礼かもしれないが、目の前の、金色の長い、美しい髪を靡<sup>なび</sup>かせ、髪が風に踊る度に露わになるエメラルドの如き輝きを持つ碧眼をした彼女は余り気にして居ない様で、軽く笑いながら「私は神様だよ、第零番創造神」と言つてのけた。

「へえ、神様ねえ……つて、神様……?」

頷いて頷いて、嘘と言つた表情をする和人に、自称神様は「嘘じゃないよ? 何なら君と言う存在を消すつて言う方法で証明してみせるけど?」と首を小さく傾げた。

「いえ、遠慮します、はい」

高速で土下座モードに以降した彼に自称神様は「別に良いよ、大

体の人はそう言う反応するからね」と苦笑した。

「成程……、それじゃあ、聞いても良いか……、つてか、良いですか？」

「今更畏まらないですよ、やり難いから。で、何？」

「俺は、死んだのか……？」

数秒の間、そして静寂と沈黙は彼女の一言で打ち破られると共に、彼に真実を告げる。

「死んだね、死因は事故死だよ」

再び間。

沈黙。

静寂。

「そう、か……、納得行つたよ。で、俺は天国？ 地獄？ それとも神流し？」

苦笑しつつ漸く告げられた真実に納得し、彼女に首を傾げた。

「え、違つよ。君は珍しく良い行いをしたからね、最上神トツツがご褒美つて事で、君を転生させる事にしたんだ」

「……へ？」

待て待て、いや待ってくれ、と和人は首を横に振った。

「転生？ 俺が？ てか珍しくつてのは余計だわっ」

其処かよ、と突つ込まないでやって欲しい。

「そつだよ？ 場所はまだ決まってるないけどね。ま、私が決めるよ、



「適当にね」

「投げやりだな、オイ」

「適当かよ、と溜め息を吐いて「ほら、行くよ？」と手招きしては歩み出す自称神様の跡を着いて行く。

三途の川を左に行き、花畑を抜け、森を迂回し、草原を超えて、辿り着いた場所は巨大な、RPGに登場しそうな古惚けた焦げ茶色の扉が8つ程立ち並ぶ、奇怪な場所だった。

「此処は……？」

「転生の間、所謂死んだ人間でも転生許可が出た者だけが来れる特別な場所だよな」

「転生、の間……、RPGホント宜しくだな……。で、俺は何処に飛ばされるんだ？」

「んー、まだ確定してないけど、もしかしたら異世界かもね。って、言うか何で君そんなに冷静で落ち着いてるわけ？」

「え……」改めてその己の落ち着き様と冷静さに気付いたのか、和人は小さく声を漏らしてから肩を竦め「自分が死んだ事に納得が行っちゃったからかもしれない……」と続けて「ま、転生するならまた別の場所でも生きられる。その時は人間らしさを持って生き抜くさ」と笑った。

「ふうん……つと、……転生場所は、……異世界、んー、君はお節介に恵まれているんだね」

「は？」

「君を、ってか勇者を求めてる、救援を求めてる国があるの。場所は異世界エルディアンテ。魔法も技巧<sup>アーツスキル</sup>も存在する世界だよ」

「RPG好きだな、ホント」

「当たり前さ。魔法のないRPG何て興奮めだよ」

「……まあ、置いておいて、俺は其処に転生するのか？」

その問いに彼女は唸ってから「此処は『<sup>ロンド・ザ・サモン</sup>輪廻召喚』にしようかなって思ってる」と和人の目を、その碧眼で見詰めた。

「『<sup>ロンド・ザ・サモン</sup>輪廻召喚』……？」

「うん、一種の転生召喚。君をその世界に召喚すると同時に違う世界の住人として転生しちゃうの。言っちゃえば同時並行かな」

「ほー……、でもさ、俺魔法も能力も何も持ってない一般人だぜ？んな世界に行っても助けられる見込みが……」

「あー……、それもあつたね。まあそれは私が解決するよ。ちよつと来て？」

「ん？」

首を傾げる和人を他所に、神様は彼に歩み寄り、その頬に触れ

、「二つ、上げるよ」

そのまま顔を近付け、そつと静かに唇を重ねた。

「ツツ！?!?」

突然重ねられれば声も出せず驚き、己の服を握る彼女を押し飛ばすわけにも行かず、唯、時間が経ち、離れるのを待った。

ほう、と、吐息と共に唇が離されれば、一瞬頬を染めた神様が直ぐに平静に戻り「渡したよ、能力二つ。君にピッタリの能力だと思う」と告げた。

「……あ、ああ……、で、そ、その能力、って、言うのは……?」

未だに唇に残るあの柔らかな感触に顔を真っ赤に染めている和人に神様は苦笑しつつ「一つは『ファンタジネット・クリエーター空想具現者』。空想を全て宝具だろ

うが能力だろフルチェットうが具現化出来る完全違反能力。で、もう一つが『インフォルティオ・サーバー情報会得者』。空想するにも情報は必要でしょ？ その

情報を全て得る能力だよ、見た物聞いた物の情報を全て知り、触れた物の扱い方から情報、過去まで知る事の出来る完全違反能力パー トツ」と頷いた。

そして速攻で、

「俺をどうしたいんよ!?!」

突っ込んだ。

「いや、だって君、キスしたら伝わって来た情報でだけど、発明力とか想像力は高いみたいだし。なら空想を具現化する何て簡単じゃないかなあって」

あはは、と笑う自称神様に彼は溜め息を吐いて、やれやれ、と肩を竦めてから「ま、有り難く使わせて貰うよ」と続け、苦笑し返した。

「それじゃあそろそろ時間だね、最後に問うよ」  
「嗚呼、何だ？」

「君、主人公なせいきゆうになつてみないかい？」

風が吹き抜ける。

声が出ない。

「え……」

「そつだよ、主人公。今あの世界は主人公が居ないからね。いや、一応居るけど皆独壇場での独りよがり。完全遊んでいるだけみたいなの。だから君みたいな主人公が必要なのさ」

主人公。

『もし』なれるなら、と思っていた一つ。

主人公。

『もし』そんな力を得られるのなら、と思っていた一つ。

それが今、両方得られ、なれるかもしれない。

掴めるかもしれない。

求めていた物が、目の前にある。

世界を救えるかもしれないその力。

救世の英雄と讃えられるかもしれないその力。

だが 違う気もする。

それで良いのか、と誰かが言っている。

それが良いのか、と誰かが尋ねて来る。



「そうさ、此処が出発点。そうそう、君の携帯、ちよつと弄って私とだけ繋がる様にしたから」

「弄るなっ」

「良いじゃないか、減る物じゃないし。それじゃあ良い結果を期待してるよ」

「え………?」

えいつ、と彼を押し飛ばす自称神様。

「ふ、ふ、ふざけんなあああああつあああああああああああああああああああああああ  
あああああ!!!!!!」

体が舞い上がれば、そのまま空中を浮遊し、扉に吸い込まれれば消え去る和人。

ゆつくりと重低音を響かせながら閉じて行く扉を見詰め、彼女唯願う。

「君に掛かってるんだよ、あの世界の運命は」

届かぬ願いは、唯、彼の為に。

### 第三話 戦争と空想者

漆黒の闇。

闇は流れ、更に深い闇へと和人は落ちて行く。

「これ、本当にそのエルディアンテとか言う異世界に通じてるんだろっな……」

落下しつつ呟く。これで実は出たら地獄でした何て言う最悪の展開だけは止めて欲しい。

しかし、本当だったなららしく、闇はまるで黒い紙を破るかの様に引き裂かれ、千切れ、光を受け入れて行く。

眩い程の光が彼を包み。

「第三番遠距離部隊、装填、放てえええつつ！！！」

怒声に似た声が硝煙の香る荒野に轟き、声に応える様に奇妙な銃を構えていた青年や男性女性達が空中を舞う浮遊要塞に向けそれぞれの装填した物を放つ。

ノズルフラッシュが銃口で炸裂し、ズガガガガッ！！　と言う連射音がその場を支配した。

ツキュウンツキュウンツキュン！！　とそれぞれの赤やら青やら黄色やらの、弾丸ではない閃光の様な物は浮遊要塞に迫り、直撃すると同時に弾け、墜落させて行く。

「大型要塞は放って置け！！　今は小型の戦闘機を狙え、良いな！　！　無駄弾は撃つな、当たらないと思ったら撃つんじゃない、分かっただなああっ！！！！？」

『おおおおおおおおおおおおおおおおつつつ！！！！！！』



に手を突っ込みながら、崩壊した民家の屋根の上に立つ青年の姿があった。

「あのだ」

青年が声を漏らす。

部隊長達は皆体を強張らせ、新手かと思い武器を構えようとするが、青年は慌てて此方にその藍色の瞳を横目に向けて、告げて来た。

「俺は敵じゃないから」

そして始まる。

青年による、破壊の宴が。

あの青年は誰なのか。

それを知るには、約10分程時間を遡る必要がある。

約10分前の事。

「うわああ嗚呼嗚呼嗚呼ああああアあああああああ……！  
……！」

良く叫ぶなと思うだろうが、これは致し方ないのだ。



何せ空中で穴は闇は消え去り、地上から数百メートル地点で吐き出されたのだから。

「クソ、クソ!!! クソツタレ!!! せめて地面で吐き出せよ!!! これじゃあ死ぬじゃん!!! また死んじゃうよ、畜生が!!!」  
急激な速度で落下しつつ、和人は叫ぶ。

しかし叫びは風にかき消され、その代わりに視界にある物が飛び込んで来た。

「あれは……、国、なのか……?」

もうもうと黒煙を上げる国家と思える場所。そしてその国家に攻め込んでいるのか、己より下の空を様々な戦闘機と思える兵器が舞い踊っている。

「成程……、あの国ね、その救援信号とやらを発して俺に助けを求めたのは……」

納得しつつ、はたと気付く。

「待てよ……、って事は、俺、何。来て早々戦争に巻き込まれるって訳!?!」

若干語弊もあるだろうが、まあそうなるだろう。そもそも戦争なのかどうかも分からない為に、どうすれば良いのかも今の彼には分からない。

現代の若者に戦争を求める方がそもそもどうかしているだろう。

「ととと、その前に取り敢えず着地だな、着地。このまま行ったら……、確実に民家に突っ込むな……、それは避けよう。近所迷惑甚だしい」

うんうんと1人頷きつつ、それじゃあどうする、と考える。

時間はないのだが、思考を巡らせる。

そしてある結論に至る。

「……能力、使って見ますかあ」

実は彼も彼で使ってみたくてたまらない思いと、使った後の副作用や周囲への損害、迷惑、被害を考えると恐怖の思いがあっただうしたら良いのか悩んでいたのだ。

「……ま、大丈夫だよな、あの神様も何も言っていなかったし……、  
よし、それじゃあ空想が具現化するんだったら 何でも良いんだ  
よな」

瞳を閉じる。

きつともう民家に突っ込むまで5分もないだろう。

だが、彼にとって空想等

「1分で十分だ ? 舞遊?」

名前は完全適当だが、それでも十分効果を発揮した。

「おとと、つ、と、と……。難しいな……、こりゃ……」

周囲の風を足に纏わせる力、それが今回の空想した物。

本当は風を纏う靴やら、翼を空想し、具現化すれば良かったのだ  
ろうが、しなかった。理由としては簡単で、翼を纏うと化け物扱い  
されそうだし、風を纏う靴と言っても今やっている事と余り変わら  
ないのでやる必要がないと踏んだのだ。

「さて、と……、試しだな、これも……、あの戦闘機っぽいのが敵  
なら」

黒煙の中に舞い降りながら、次の攻撃になりそうな物を空想する。

それは虚空より出る物。

それは一撃必殺。

追尾無し。

「? 黒い杭?」

自然と漏れた言葉。

脳内で決定した通り、黒い、直径40センチ位だろうか。それ位  
の杭が虚空より数本具現化し、戦闘機に降り注いだのだ。

何が起こったのか分からぬまま、戦闘機は撃墜され、大爆発を巻  
き起こす。

「ふう……、成程成程、分かって来た……」  
頷いてから、屋根に舞い降り、其処で気付く。  
周囲の視線に。

特に剣やら槍やら銃を持つてる鎧姿の方々の視線が鋭い為痛々しく、ついでに言つのなら既にその鎧を纏っている方々は臨戦態勢だ。

「ま、待つて待て。俺は敵じゃないってのに……」  
和人は苦笑してから肩を竦め、空中に視線をやってから、投げ掛けた。

「あのさ」

同時、思考回路が高速化された気がした。  
既に頭の中では、戦闘の準備済みだと言つ事だろうか？

「俺は敵じゃないから」

ズ、ドンツ！！　と言つ衝撃音を響かせ風を螺旋状に足元で爆発させ、舞い上がる。

まだ扱い慣れて居ない為、ふらふらするも、それでも此処まで扱えるのならやはりこれはその戦闘に直ぐに対応して行く、天性の戦闘センスの戯物たわものと言つた所だろうか？

そして始まる、捕獲の宴が。

破壊ではないと、断じて言いたい和人でもあった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5032z/>

---

エンドレスストリ 『もし』

2011年12月18日00時47分発行